

『トラクターの世界史 —人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち—』

藤原辰史著

農業・農村領域 研究員 竹島久美子

2013年、農林水産省はロボット技術やICTを農業分野で活用し、超省力・高品質生産を実現する新たな農業（スマート農業）を実現するための研究会を立ち上げました。すでに、二台一組のトラクターの片方を自動運転モードにすることで操縦に熟練したオペレーター（操縦者）が一人いれば二台分の作業ができたり、またリモートセンシング（観測技術）を用いて、圃場の作物の生育状況を画像から判断し追肥を調整して収量を高めることができたりと、新たな機能を備えた農業機械が商品化されています。このように最新鋭の技術が導入されている農業機械ですが、その原点はトラクターです。初期のトラクターは役畜の犁と同様に耕すだけでしたが、動力源として脱穀などの様々な農作業をこなせるようになったことで活用の幅が広がり、20世紀の農業技術革新はトラクターを軸に進められてきました。

さて、本書はそのトラクターの開発と普及の歴史を取り上げています。全体は6章で構成されており、第1章「誕生」では、内燃機関が発明され現代のトラクターの原型がアメリカで開発されるまで、第2章「トラクター王国アメリカ」ではフォード社などがトラクター生産に参入し量産体制が確立されるまでの歴史が描かれています。第3章「革命と戦争の牽引」、第4章「冷戦時代の飛躍と限界」ではそれまでの二つの章とは少し色合いが変わり、二度の世界大戦とその前後の各国の政治体制においてトラクターが課せられた役割について、新たな歴史観を刺激的に示しながら述べられています。第5章「日本のトラクター」では、黎明期では海外から輸入していたトラクターが日本企業によって日本の土地柄に合うよう開発されてきた歴史が描かれており、終章「機械が変えた歴史の土壌」では、これまで取り上げた史料を踏まえながら、技術史、経済史だけでなく、文化史の面からトラクターが人々の未来社会像を牽引してきたのではないかと指摘し、今後のトラクターの展望を検討しています。

本書で著者は、トラクターがこれまで果たして

きた役割は、単なる労働負担の軽減と作業効率の向上だけではないことを指摘しています。トラクターが普及するなかで、農民は機械のトラクターに対して憧れや親しみと

いう好意的な感情だけでなく、恐れや憎悪という感情を抱きながら共に歩んできた歴史があったこと、あるいは政治的指導者たちからの期待を受け、国家プロジェクトの旗印にされたこともあったことが史料に基づいて述べられています。現代社会でも、新たな技術に対して科学的・制度的・感情的にどうやって折り合いをつけていくかは、とても重要な課題です。政策的にどのように位置づけていくかについても慎重な判断が求められる部分です。そのような現代的な意義も含め、「人間が機械を通じて自然界や人間界とどうつきあっていくかを考える」ための材料として、トラクターを素材に歴史的な整理を試みた心意気のある著作だといえます。

また、本書では、トラクターと関連づけて、「第一次世界大戦期の戦車の登場の背景に履帯（キャタピラ）トラクターの開発があったこと」、「独ソ戦ではトラクター工場で造られた戦車が活躍したこと」、「戦前日本の岡山での歩行型トラクター開発の背景に、ソ連の農業集団化の憧れがあったこと」、「トラクター誕生の衝撃はヒトラー、レーニン、スターリン、毛沢東にも及んだこと」を指摘しています。牧歌的な田園風景の象徴ともいえるトラクターが、実は、産業革命以降の激動の中で様々な役割を果たしてきたのだと思うと、トラクターを見る目が変わるのではないのでしょうか。

およそ100年の世界史を、トラクターをツールに振り返ることのできる本です。手に取りやすい新書でもありますし、是非幅広い方に読んでいただきたいと思います。



『トラクターの世界史
—人類の歴史を変えた「鉄の馬たち」—』
著者／藤原辰史
出版年／2017年
発行所／中央公論新社